

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成21年度病虫害発生予報第1号(4月)について

このことについて、病虫害発生予報第1号を発表したので送付します。

予報第1号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
麦類	赤かび病	やや早	-	並	並
かんきつ	かいよう病 ミカンハダニ	- -	やや多 並	やや多 並	並 並
なし	黒星病 赤星病	早 早	- -	やや多 多	並 並
かき	フジコナカイガラムシ	-	-	並	並
茶	カンザワハダニ	-	多	多	多
冬春イチゴ	灰色かび病 つとんこ病 ハダニ類	- - -	並 並 並	並 並 並	並 並 並
冬春ナス	すすかび病	-	並	並	並
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病	- -	並 並	並 並	並 やや少
冬春キュウリ	べと病	-	少	やや少	やや少
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類	- -	並 並	並 並	並 並

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

気温は低いでしょう。降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は低く、2週目、3~4週目は平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	50	30	20
降水量	40	40	20
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 平成21年3月27日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物】

1 麦類の赤かび病

（1）予報の内容

発生時期：平年よりやや早

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報では、降水量は平年並か少ない。開花期に当たる4月中下旬の気温は平年並である。

イ 農業総合試験場の調査によると、今後気温が平年並で経過した場合、出穂期は小麦、大麦ともに平年より4～6日程度早くなると予想される（平成21年3月19日付福岡県米麦大豆生育情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 主要感染時期である開花期から開花10日後までに暖かい雨（平均気温15以上）に遭遇すると、本病が多発する可能性が高い。

イ 小麦の防除適期は、開花期（出穂期後7～10日頃）である。適期防除を実施後、降雨が続く場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

ウ 二条大麦の防除適期は、穂揃期後約10日頃（出穂期後12～14日、蒴殻が抽出し始める頃）である。この時期は収穫前30日頃となるため、薬剤の選定に当たっては、収穫前規制に留意する。

エ 裸麦の防除適期は、穂揃期（出穂期後2～4日）である。適期防除を実施後、降雨が続く場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

オ 出穂期は、播種日、品種及び今後の気温の変動等によりほ場ごとに異なるので注意する。

カ 降雨の合間に薬剤防除を行う場合、液剤は散布後一旦乾けば降雨があっても薬剤の効果はある。しかし、粉剤の場合は、散布後6時間以内に降雨があった場合は薬剤の効果は低下するため、天候に留意する。

キ 防除に当たっては、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守するとともに、周辺圃場への飛散防止対策を講ずる。特に、薬剤によっては、小麦、大麦で農薬使用基準が異なる場合があるので注意する。

【果樹】

1 かんきつかいよう病

（1）予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

（2）予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

発病葉率 1.1%（平年 0.7%、前年 2.0%）

発生ほ場率 45.5%（平年 16.4%、前年 33.3%）

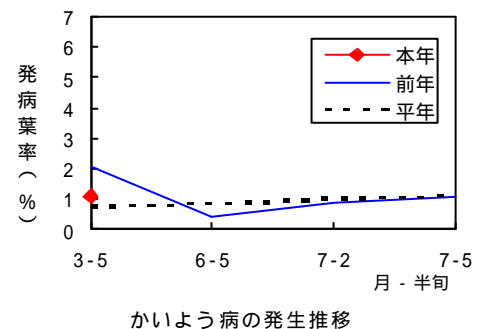
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている（±）。

（3）防除上の注意

ア 罹病葉や罹病枝は伝染源となるので、可能な限り除去し、園外に処分する。

イ 風雨によって伝染するので、強風雨が予想される場合は、必ず予防散布を行う。

ウ 多発園では、防風対策及びミカンハモグリガの防除を徹底する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

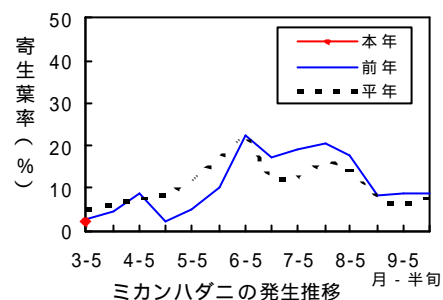
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 5.5% (平年 5.0%、前年 2.9%)

発生ほ場率 54.5% (平年 38.0%、前年 37.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(-)。



3 なし黒星病

(1) 予報の内容

発生時期：平年より早

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の8月2半旬調査では、発病葉率が1.4% (平年0.8%、前年1.1%)、発生ほ場率が57.1% (平年 2.9%、前年58.3%) であり、越冬菌量はやや多いと思われる(+)

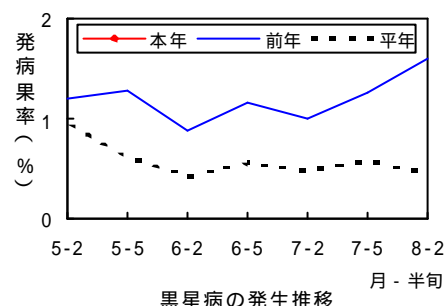
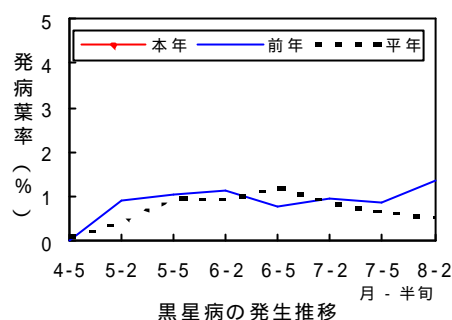
イ 幸水及び豊水の開花期は平年より12日程度早い(農業総合試験場調べ)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除は、開花直前から満開20日後までの主要感染時期に、本病に効果の高いDMI剤を主体に7~10日間隔で実施する。また、薬剤耐性菌の発生を回避するため、DMI剤以外の剤とのロ-テ-ション散布を行う。

イ 伝染源である芽基部病斑はできるかぎり剪除し、園外に処分する。



4 なし赤星病

(1) 予報の内容

発生時期：平年より早

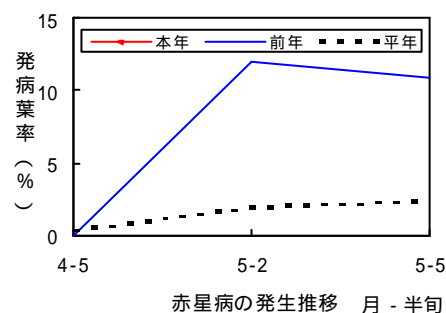
発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の5月5半旬調査では、発病葉率が10.9% (平年1.5%、前年1.8%)、発生ほ場率が80.0% (平年 31.3%、前年40.0%) であり、越冬菌量は多いと思われる(+)

イ 3月26日調査では、ビャクシン類の冬孢子堆成熟度は47.5と高い(+)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。



(3) 防除上の注意

最近、赤星病に効果の高いDMI剤を散布したにもかかわらず、本病が多発する事例が報告されている。赤星病菌は、ビャクシン類の枝葉の組織内に菌糸態で越冬し、2月頃から枝葉上に冬孢子堆を形成する。この冬孢子堆は3月頃からの降雨の際に成熟し寒天状に膨潤する。発芽した冬孢子堆は小生子を生じ、なしに飛来し感染する。3月26日の調査では、成熟が進んでいる地域があり、なしへの飛来が始まりつつある。完全に膨潤した冬孢子堆が一部確認された時期から、すべての冬孢子堆が成熟するまでが感染時期であることから、各地域の冬孢子堆成熟状況に注意する（発生予察情報提供予定）。なお、薬剤防除は、黒星病との同時防除を兼ねて、本病に効果の高いDMI剤を主体に実施する。

5 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の10月2半月調査結果、発生量はやや少なかった(-)。

寄生果率 12.3% (平年 18.8%、前年 19.8%)

発生ほ場率85.7% (平年 87.0%、前年 100%)

イ 前年の8月以降に果樹カメムシ類が多発したため、薬剤防除により土着天敵に悪影響を及ぼしていると思われる(+)

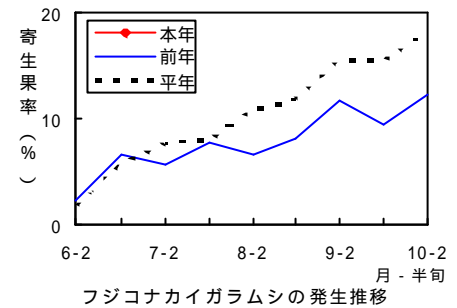
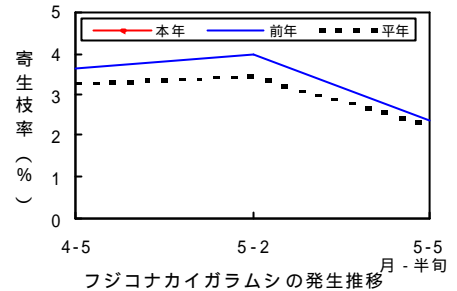
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 越冬虫が移動を始める前までに、枝の分岐部等に削り残しが無いよう粗皮剥ぎを行う。

イ 越冬幼虫の新梢への移動時期から薬剤防除を徹底する。

【果樹・その他の病害虫】



作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ そうか病	並	並	並	発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 罹病葉は伝染源になるので除去する。
ぶどう 黒とう病	-	やや少	やや少	頂芽の展葉2～3枚期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 罹病枝や巻きひげは除去する。
かき 炭疽病	-	-	-	伸長始めから硬化前まで感染発病する。 薬剤防除は、天気予報の最高気温と最低気温の和が40以上で降雨が予想される日の直前から開始する。
果樹カメムシ類	-	-	やや多	越冬量は、前期(4～7月)少発年であった前々年並であることから、越冬世代成虫の果樹園への飛来量は少ないと予想される。(平成21年2月24日付け「速報第3号」を参照)

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

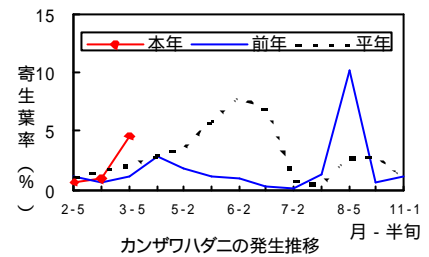
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かつた(+)。

寄生葉率 4.7%(平年 2.1%、前年 1.0%)

50葉当たり虫数4.3頭(平年 2.3頭、前年 1.3頭)

発生ほ場率 55.6%(前年 24.0%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア ほ場をよく観察し、寄生葉率2%以上の茶園では、農薬使用基準を遵守し防除を行う。

イ 霜害後は多発しやすいので、なるべく早めに防除する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜】

1 イチゴ灰色かび病

(1) 予報の内容

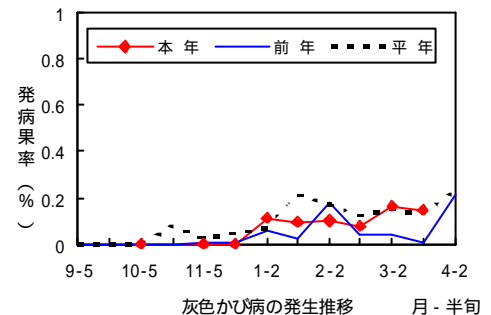
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.1%(平年 0.1%、前年 0.0%)

発生ほ場率 30.4%(平年16.4%、前年 4.0%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発病した果実は早めに除去し、薬剤防除を徹底する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

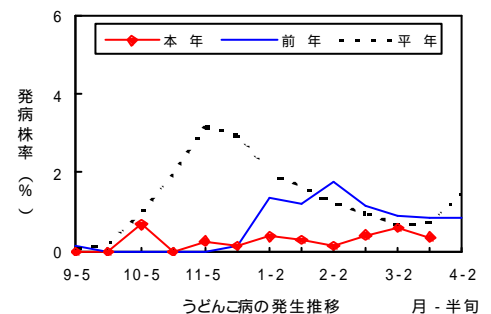
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.3%(平年 0.7%、前年 0.8%)

発生ほ場率 8.7%(平年13.7%、前年15.4%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 栽培が終了した罹病株が採苗床の周辺に放置されると、分生孢子が飛散し発病することがあるので、栽培終了後は土中に埋没するなどして処分する。

3 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(+)。

寄生株率 12.9%(平年11.4%、前年15.2%)

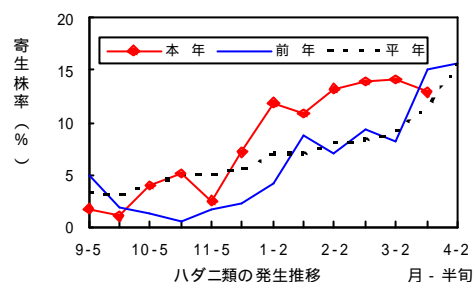
発生ほ場率 69.6%(平年48.7%、前年69.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 防除は摘葉後に行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。



4 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 17.4%(平年19.6%、前年18.6%)

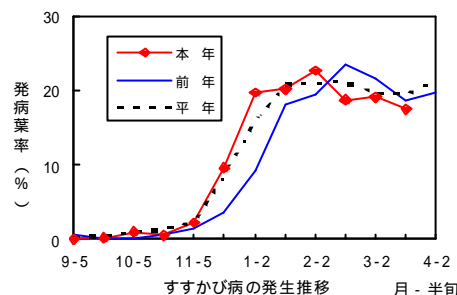
発生ほ場率 89.0%(平年90.4%、前年88.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発病葉は早めに除去し、ほ場外に処分する。

イハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。



5 トマト灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.3%(平年 0.7%、前年 0.4%)

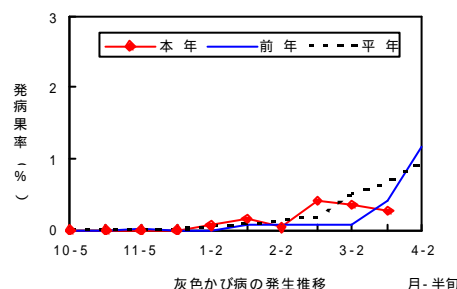
発生ほ場率 63.6%(平年 45.8%、前年16.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発病した茎葉や果実は早めに除去し、薬剤防除を徹底する。

イハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。



6 トマト葉かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

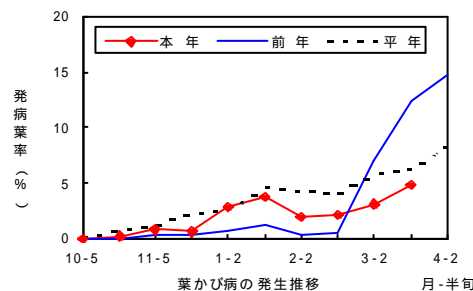
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 4.9%(平年 6.1%、前年12.4%)

発生ほ場率 40.0%(平年 38.2%、前年27.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 薬剤は葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。
- ウ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。

7 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

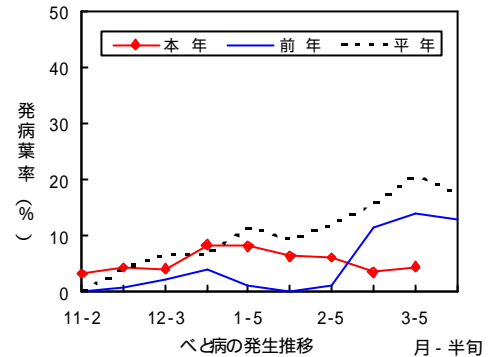
発病葉率 4.3% (平年20.6%、前年13.9%)

発生ほ場率 50.0% (平年69.3%、前年60.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。
- イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。



8 ミナミキイロアザミウマ (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

ナス寄生葉率 3.2% (平年 4.7%、前年 7.1%)

発生ほ場率 56.0% (平年35.6%、前年77.8%)

ナス被害果率 0% (平年 0.5%、前年 0.2%)

発生ほ場率 0% (平年23.6%、前年11.1%)

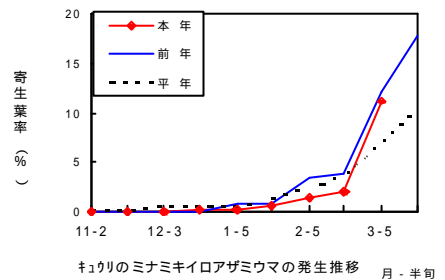
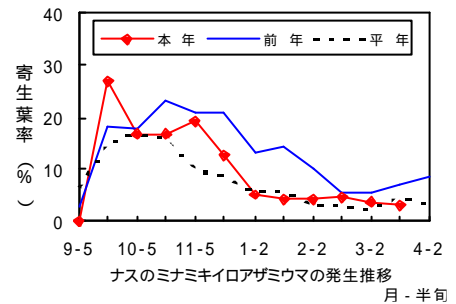
キュウリ寄生葉率 9.3% (平年 6.9%、前年12.0%)

発生ほ場率 66.7% (平年46.3%、前年60.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないよう丁寧に散布する。また、多発した場合は、約1週間後にもう一度薬剤散布を行う。
- イ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の増殖源を絶つ。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、本年度の薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。
(ホームページアドレス <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/tebiki.html>)
- エ 本種は、キュウリ黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。栽培終了時には、薬剤防除やハウスの蒸し込み等を徹底し、媒介虫をハウス外に逃がさないようにする。



9 コナジラミ類（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

ナス寄生葉率 3.3% (前4か年平均 6.0%、前年 3.0%)

発生ほ場率 78.0% (前4か年平均66.0%、前年33.0%)

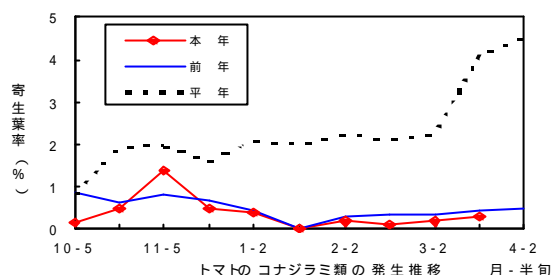
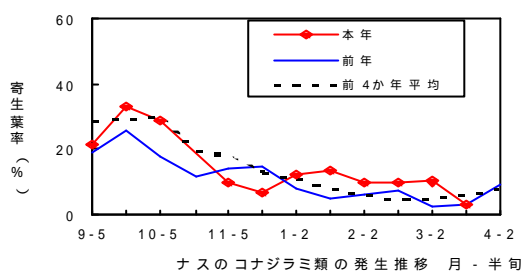
トマト寄生葉率 0.3% (平年 4.1%、前年 0.4%)

発生ほ場率 18.2% (平年35.1%、前年16.7%)

キュウリ寄生葉率 0% (前年 0.8%)

発生ほ場率 0% (前年20.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は平年並か少ないとされている(±)。



(3) 防除上の注意

ア 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げるとともに、葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。

イ ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の増殖源を絶つ。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、本年度の薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

エ タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病(TYLCV)やキュウリ退緑黄化病(仮称)(CCYV)の媒介虫である。栽培終了時には、薬剤防除やハウスの蒸し込み等を徹底し、媒介虫をハウス外に逃がさないようにする。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ アブラムシ類 アザミウマ類	並 並	並 並	並 並	・低密度のうちに防除する。
冬春ナス うどんこ病 灰色かび病	並 並	並 並	並 並	・発病葉や発病果実は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
冬春キュウリ うどんこ病 灰色かび病	やや多 並	やや多 並	やや多 並	・薬剤は、葉の表裏に十分かかるように丁寧に散布する。 ・発病果実は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるなど十分に注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数など、ラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnp.ne.jp